

〔総特集にあたって〕

ロシアとヨーロッパ——狭間の地域研究

福田 宏

I 「狭間」の地域研究を目指して

狭間とは、いささか歯切れの悪いタイトルである。世界各地の問題について考える際には、アジアやアメリカ、ヨーロッパやアフリカといった地域的な区分がまず頭に思い浮かぶ。アジアについては、東アジアや東南アジア、南アジアといった更なる区分がなされる。他の地域についても同様である。だが、どうしても区分けが困難な地域、すなわち狭間と呼

ばざるをえない地域が出てきてしまう。二〇一四年に入って改めて注目を浴びるようになったウクライナがその一例であろう。一九九一年に独立したとはいえ、もともとウクライナは旧ソ連のなかの一共和国であり、現在においてもロシアと密接な関係を有している。その一方で、ウクライナではヨーロッパへの帰属意識も強く、EUへの加盟も議論されているが、すでにEUのメンバーとなっている旧東欧諸国とは明確に区別されている。まさに、ヨーロッパとロシアの狭間である。ただし、地理的にはウクライナやウラル山脈以西のロシアもヨーロッパに含

められることを考慮すれば、EUとロシアの狭間と表現した方が正確かもしれない。

本特集が目的とするのは、こうした狭間の地域研究である。現在においては、国際政治上の力学が大きく変わりつつあるといわれる（土佐二〇一四）。アメリカという超大国による一極的構造が後退し、ロシアや中国のような大国が国際秩序の現状変更を意図し始めたことから、地域間の勢力バランスが崩れかねない状況となっている。そのようなとき、狭間の地域が一種の「空白地帯」と化し、対立や紛争のホットスポットとなる。地政学の復権ともいわれる所以である。少なくとも米国主導の世界秩序が揺らいでいる以上、もはや「世界共通」のルールで問題を解決することはできず、各地域が有する文脈を重視すべきとされる。

今回のウクライナ危機に関しては、ヨーロッパが地政学を見誤った結果とする向きもある。ヨーロッパがウクライナに対してもっと慎重に対応していれば、ロシアを過剰に刺激することはなかったという考え方である。旧東欧やバルト諸国が西側に組み込まれていくこと、端的に言えばEUとNATOに加

盟することについては、ロシアは許容した。だが、ウクライナは旧ソ連のなかでも別格の存在であり、政治的・歴史的にロシアとウクライナの結びつきは極めて強い。こうした見方によれば、ヨーロッパは不注意にもロシアの「勢力圏」たるウクライナに土足で踏み込んでしまったということになる。

II 「狭間」としての中央ヨーロッパ、あるいは中欧

ヨーロッパとロシアの狭間を見るうえで、ウクライナだけでなく冷戦時代に東欧と呼ばれていた地域も含めて考える必要がある。旧東欧の大部分は二〇〇四／〇七／一三年にEU加盟を果たし、ルーマニア、ブルガリアおよびクロアチアを除いてはシェンゲン域にも入っている。現在では北欧からイベリア半島までパスポートのチェックを受けることなく移動することが可能であるが、裏を返せば、その分だけEUかつシェンゲン域の外部となったウクライナとの敷居が高くなっている。だが、現在のウクライナには、かつてのポーランドやチェコスロ

ヴァキア（当時）などの領域が含まれており、国境地域における双方の関係は今でも継続している。

例えば、ポーランドとウクライナの境界地域に拠点を置くポーランドの作家スタシユクとウクライナの作家アンドルホヴィチが、共同で中央ヨーロッパをテーマとするエッセイ集を刊行したことは興味深い（加藤二〇一四）。『わたしのヨーロッパ——い
わゆる中欧についてのエッセイ』と題する本書は、EUの東方拡大に先立つ二〇〇〇年に出版されている。二人の作家が居住する場所は、ハブスブルク君主国時代にガリツィアと呼ばれた領域でもある。このガリツィアは第一次世界大戦後にポーランドに入り、第二次世界大戦後には、西側がポーランド領に、東側がウクライナ領になった。そして、二〇〇四年に前者がEUに組み込まれた結果、ガリツィアという領域はヨーロッパの内と外に分割される格好となった。スタシユクとアンドルホヴィチの二人は、「わたしの」という一人称を前面に押し出したつ、西でも東でもない中央ヨーロッパの存在を浮かび上がらせていく。

ここで中央ヨーロッパ、あるいは中欧という言葉

について説明しておく必要がある。この用語は、まさにヨーロッパとロシアの狭間を示す概念である。あるいは、狭間という以上の意味を持たないといった方が良いかもしれない。中央ヨーロッパという概念には、「何か」と「何か」の間という共通了解は存在するものの、これが中央ヨーロッパであるという確固とした核があるわけではない。そのため、地理的範囲には多くのヴァリエーションが存在する。例えば、ドイツを中心に考えればフランスと東欧・ロシアの間、チェコやポーランドを中心に考えればドイツとロシアの間ということになる。先ほど挙げたスタシユクは、自らの居住地点を中心とする半径三〇〇キロメートルの範囲を「わたしの」中央ヨーロッパと呼んでいる（加藤二〇一四…一六七—一六八）。そこには、ウクライナ、ポーランド、ベラルーシ、スロヴァキア、ルーマニアといった国々が含まれる。

では、「学術的な」定義についてはどうだろうか。図1は、主として二〇世紀前半におけるドイツ系地理学者の定義を重ね合わせたものであるが、興味深いことに一六通りの中央ヨーロッパがすべて重

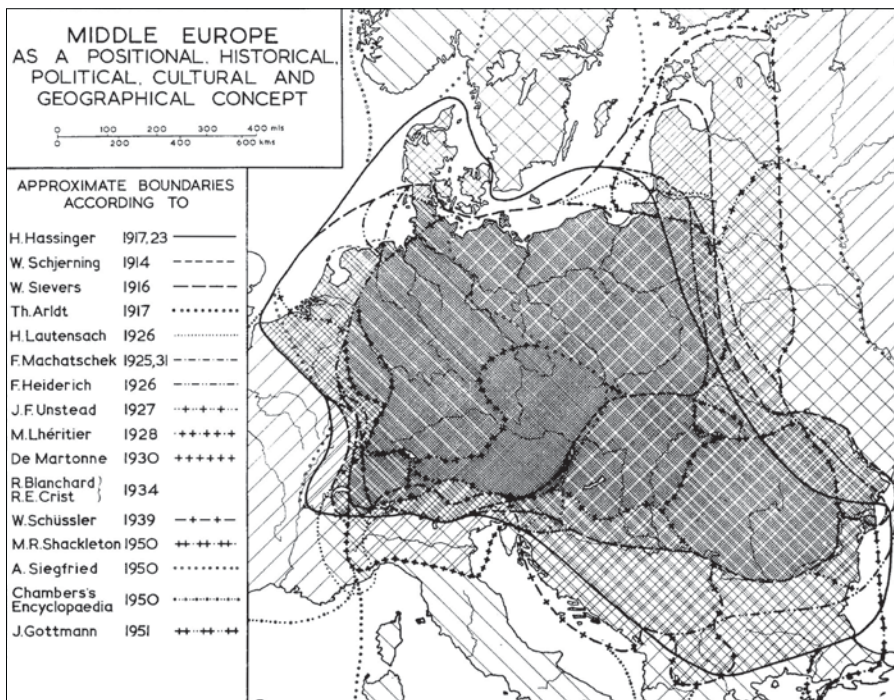


図1 20世紀前半における地理学者による中央ヨーロッパの定義

(出所) Sinnhuber 1954: 19.

なるのはオーストリアとチェコ地域だけであり、ドイツ自体は含まれていない。

中央ヨーロッパの名称も多様である。差しあたり日本語と英語だけで考えたとしても、中央ヨーロッパもしくは中欧 (Central Europe, Middle Europe)、中・東欧 (Central and Eastern Europe)、東中欧 (East Central Europe) といった呼び方が挙げられよう。また、ドイツ語圏にはミッテルオイローパ (Mitteleuropa) という単語がある。そのまま訳せば中欧 (Middle Europe) となるのだが、他の言語には置き換えられない色付きの言葉と見なされている。ミッテルオイローパは、第一次世界大戦という流動的な時期に広く使われるようになった単語であり、そこにはドイツとハプスブルク君主国を併せた広大な地域の再編が含意されていた (板橋 二〇一二)。だが、チェコやポーランドといった近隣の小規模民族にとっては、ドイツの主導権を前提とするミッテルオイローパは警戒すべき単語であった。念のために付け加えれば、一九三三年に政権を握ったナチスはミッテルオイローパを積極的に使ったわけではない。だが、この言葉はドイツによる膨張志向

を想起させる危険な概念として第二次世界大戦後も記憶されたのである。

今日の視点から見れば、冷戦期は中央ヨーロッパ概念の一時的な凍結期間であったともいえる。この時代、ヨーロッパは東西それぞれのブロックに分割され、中央というカテゴリーは意味をなさなくなった。鉄のカーテンの東側では、ソ連を中心とする社会主義圏が成立し、西側においては、自由主義陣営のなかでの統合が進展した。後のEUへとつながる動きもまた、冷戦構造を前提とする枠組のなかで生じたのである。

だが、一九八〇年代より、チェコスロヴァキア、ポーランド、ハンガリーといった国々では、反体制派知識人が中央ヨーロッパについて語り始めていた (篠原二〇〇八)。例えば、フランスに亡命したチェコ人作家ミラン・クンデラは「誘拐された西欧」という挑発的なタイトルのエッセイを発表している (クンデラ 一九九二)。それによれば、中央ヨーロッパはソ連によって無理やり東に組み込まれただけであり、本来的には西に属しているはずであった。彼ら／彼女らが望んでいた西ヨーロッパへの「回帰」

は、冷戦期においては夢物語でしかなかったが、一九八九年の体制転換によって現実のものとなった。今世紀初頭のEU拡大により、旧東欧を中心とする地域がEUの一員となったことは、この「回帰」を象徴する出来事と受け止められた(羽場二〇一四)。

Ⅲ 浮遊するウクライナと 中央ヨーロッパ

とすると、ウクライナはどうなるのか？ この国はいつたい、どこに「回帰」すべきなのだろうか？

旧東欧諸国の加盟によりEU拡大は一段落した状況にある。現段階で二八カ国の組織となったEUでは、「拡大疲れ」もあり、今後も積極的に加盟国を増やしていくという状況にはない。とはいえ、EUそのものは少なくとも建前のうえでは開かれた組織である。ウクライナや西バルカン、トルコといった国や地域についても、加盟を妨げる理念上の問題は存在せず、手続きさえ踏めばEUの一員となることができる。だが、ことはそう単純ではない。この問題は、どこまでがEUの加盟国となりうるのか、さ

らには、どこまでがヨーロッパであり、どこからが非ヨーロッパなのか、という根源的な問いにもつながっているためである。

例えばポーランドは、EUの東方政策に対して非常に積極的な立場を取っている(宮崎二〇一四)。

自国のEU加盟と同じ二〇〇四年に、ウクライナで「オレンジ革命」が成立したことも大きな意味があった。ポーランドにおいては、EUの「フロンティア」に位置する国家として、民主主義といった普遍的価値の拡大に努め、近隣諸国の安定化に積極的に関与すべきという議論がさかに行われるようになった。だが、EU加盟国のすべてがこうした「使命感」を共有しているわけではない。ウクライナの加盟を検討するうえでは、何よりもまずロシアとの関係を考慮する必要がある。結局のところ、EUにも注意を払う必要があった。結局のところ、EUはウクライナの加盟を事実上棚上げにしたまま、ロシアの動向を見つつ、軍事およびエネルギー安全保障の観点から対ウクライナ関係の安定化を進めてきたことになる(東野二〇一一)。だが、現在のウクライナ情勢は、これまでの微妙なバランス

が崩れてしまっていることを示唆している。この事実は、EUとロシアの狭間、ヨーロッパとロシアの狭間、あるいは、東と西の狭間という問題が、二一世紀の現在においても生きていることを意味するのだろうか？

本特集においては、以上の点を考えるために、現在のウクライナ（第I部）と両大戦間期の中央ヨーロッパ（第II部）に焦点を当てる。さらに座談会では、ヨーロッパ以外の専門家も交えて、より広い視点からロシアとヨーロッパの間について検討する。

ウクライナ情勢については、依然として先が見えない状態が続いているが、ここでは、現状を逐一追いかけるというよりは、現在と過去の双方の視点から問題の背景や構図を明らかにすることに重点を置いている。現在の世界はウクライナ以外にもさまざまな課題を抱えている。この特集が、狭間の地域を考える上で一つの指針となることを願うばかりである。なお、諸般の事情により、今号の刊行が当初の予定より半年ほど遅れたため、座談会と第I部を中心に最低限の修正を施していることをお断りしておきたい。

●参考文献

板橋拓己（二〇一三）『中欧』理念のドイツ的系譜

『思想』（特集『中欧』とは何か？——新しいヨーロッパ像を探る）、一〇五六号、一〇七一—二三頁。

『外交』（二〇一四）（特集『欧米の誤算が生んだウクライナ危機』）二二五号。

加藤有子（二〇一四）『ポーランド・ウクライナ国境地帯からみた『ヨーロッパ』——ユーレイ・アンドルホヴィチとアンジェイ・スタシユクの中欧論』『現代思想』（特集『ロシア——帝政からソ連崩壊、そしてウクライナ危機の向こう側』）、四二巻一〇号、一六四—一七四頁。

ミラン・クンデラ（一九九二）『誘拐された西欧あるいは中央ヨーロッパの悲劇』里見達郎訳、『ユリイカ』

二三巻二号、六二—七九頁（原文は一九八三年）。

塩川伸明（二〇一三）『民族浄化・人道的介入・新しい冷戦』有志舎。

篠原琢（二〇〇八）『地域概念の構築性——中央ヨーロッパ論の構造』家田修編『開かれた地域研究へ——

中域圏と地球化』講座スラブ・ユーラシア学1、講談社、一九九—一四一頁。

土佐弘之（二〇一四）『Gゼロ時代のユーラシアにおける文明的圏域の思想——動員されるジオポデイ・ポリティクス』『現代思想』四二巻一〇号、一五〇—一六三頁。

羽場久美子(二〇一四)『拡大ヨーロッパの挑戦——グ
ローバル・パワーとしてのEU』中公新書。

東野篤子(二〇一三)『ウクライナのEU・NATO加
盟問題』『法学研究』(慶應義塾大学) 八四巻一号、三
三九—三七七頁。

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター(二〇一四)

「スラブ・ユーラシアの今を読む——ウクライナ情勢特

集」<http://src-slav.hokudai.ac.jp/center/essay/> (二

〇一四年一月二日最終確認)。

宮崎悠(二〇一四)『ヨーロッパの中のポーランド——

ウクライナ民主化運動への反応』『成蹊法学』八〇

号、五〇〇—四八一頁。

Simhuber, Karl A. (1954) "Central Europe, Mitteleuropa,

Europe Centrale: An Analysis of a Geographical

Term." *Transactions and Papers (Institute of British*

Geographers) 20: 15-39.

●著者紹介●

- ①氏名……福田宏(ふくだ・ひろし)。
- ②所属・職名……愛知教育大学地域社会システム講座・講師。
- ③生年・出身地……一九七一年、和歌山県新宮市。
- ④専門分野・地域……政治学と歴史学。中央ヨーロッパ研究(特にチェコとスロヴァキア)。
- ⑤学歴……北海道大学法学部、北海道大学大学院法学研究科修士課程、同博士課程、同博士(法学)。
- ⑥職歴……北海道大学大学院法学研究科助手(二八歳、三年)、同講師(三二歳、二年)、北海道大学スラブ研究センター研究員・助教等(三四歳、計四年半)、京都大学地域研究統合情報センター・助教(四一歳、二年半)。
- ⑦現地滞在経験……チェコ(二五歳、二年半、留学等)、スロヴァキア(二六歳、三年、在スロヴァキア大使館専門調査員)。
- ⑧研究方法……歴史に関わる調査については文献・史料調査、現状分析については聞き取り調査がメインとなるが、調査対象に合わせて試行錯誤を繰り返している。
- ⑨所属学会……政治学会、比較政治学会、西洋史学会、東欧史研究会、音楽学会、政治経済学・経済史学会。
- ⑩研究上の画期……大学に入学した一九八九年に「東欧革命」が起こり、この地域に関心を持つようになった。その後、一九九〇年代の旧ユーゴスラヴィア紛争をきっかけとして、ナショナルリズムについて研究を始めた。
- ⑪推薦図書……ティモシー・スナイダー『赤い大公——ハプスブルク家と東欧の二〇世紀』(池田年穂訳、慶應義塾大学出版会、二〇一四年)。第一次世界大戦期にウクライナ王国の創設を夢見たハプスブルク家の末裔、ヴェルヘルムの数奇な物語。今回の総特集で扱う地域を考える上でも大変示唆的な書物。